トラウマ、心の津波
～被災地ボランティア記⑥～

初日の訪問先は五十九世帯が住む大槌第七仮設住宅。前夜、大槌町のベースキャンプに着いた時は真っ暗で周囲はほとんど見えなかった。翌朝、仮設住宅に向かう車内から見る風景は、小雪に覆われた一面の平地。被災前はこの辺りは住宅が建ち並んでいたという。

車内に何ともいえない緊張感が漂う。特に私のような初めて被災地を訪れた者にとっては余りに衝撃的な光景である。私たちが泊まった四階建てのベースキャンプの建物には、三階の窓下の外壁に赤字で「２０１１・０３・１１」とある。ここまで津波が達したのだ。私が寝た部屋は二階、昨夜、津波に襲われていたら多分死んでいただろう。真昼の津波であったにもかかわらず町民の十一人に一人が犠牲になったというから津波のすごさがわかる。

かつての繁華街に建物はない

３階の窓下まで津波は襲ってきた

メーン道路は舗装されている。その大通りから舗装されていない小道に入り、しばらく走ると仮設住宅の集会所に着く。「お茶っ子サロン」と呼ばれる、被災者とボランティアとの交流会が始まるのは午前十時。まだ多少時間はあるが誰も来ていない。

十四畳ばかりの集会室で準備を終え、被災した人たちが来るのを待つ。ポツリポツリと老婦人が来られる。五十九戸だからと五十九個のクリスマスケーキを持ってきたのだが、想像よりも少ない。

せっかく本州の西の端から十三人もが新幹線を乗り継いで一日かけて来たというのにという気持ちがよぎる。そういえば、夏に来た人たちの体験集の中にも、集会所に来る人が少なかったという文章があった。

集会室の壁一面にボランティアグループが書き残したメッセージが張ってある。大きな「希望」という字が目に入る。ふと、今、仮設で生活している人たちはどんな希望を持っているのだろうと考える。

戦争中の出来事ではない。平和で、平穏な生活をしていた時、突然津波に襲われ、肉親を、住む家を、すべての財産を奪われた…パレスチナのトラウマ（精神的外傷）を負った子どもたちが頭に浮かぶ。

目の前で戦車で自分の住む家が壊されたり、肉親が砲撃で死ぬ。子どもたちは長い時間をかけてそのトラウマのケアを受ける。娘はパレスチナでその手助けの仕事などをしており、私もパレスチナに行ったことがある。

私はトラウマは紛争地の子どもたちだけのものと思っていた。そうではない、今、この仮設住宅に住む多くの人たちもまた「心の津波」というトラウマを負っている。だから神父は何回もここを訪ねているのだろう。

トラウマのひどい人は集会所に出てくることさえ負担になっているのではないか。集会所に来る人の人数が少ないと思った自分を恥じた。たった一人でもよい、そのような気持ちの被災者の手助けのために来たのだ。

集会室のたくさんのボランティアたちのメッセージ